歳時記の郷

2020年 冬 第117号

奥会津だより

なかきよのとおのねふりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな

（長き夜の 遠の眠りの みな目覚め 波乗り船の 音のよきかな）

回文歌 時代・詠み人不詳

かすかな雪の音を聴きながら
昭和村の女性たちは糸を紡ぐ
からむしを裂いて繋いでまた裂いて
オボケ（苧桶）に秘した
雅（みやび）の世界で遊びながら

写真：菅　敬浩

奥会津の自然誌 2

奥会津の急な山

写真・文　新国　勇

奥会津にある只見町や金山町の山は、やせた尾根と急峻な斜面をもっている。これは春先に発生する雪崩によって、山腹斜面が削られてできたものだ。

「雪食地形（せっしょくちけい）」とよばれる独特な山容は多雪地ならではのもので、世界に例を見ない景観といえる。そこは雪崩（なだれ）に毎年攪乱されることにより、岩場、草地、低木林、高木林がモザイク状となった複雑な生態系をつくりだし、多種多様な植物や動物が生育し生息する。さらに山菜やキノコ、薪炭（しんたん）など豊かな自然の恵みをもたらす場にもなっている。多雪が生みだした急峻な山は、奥会津のシンボルであり宝だ。

奥会津に棲む神々

ほろしの神様と豆腐半丁

金山町山入字鮭立の小高い岩山には、地元では「ゆう」と呼ばれる窟があり、半肉彫りの摩崖仏五十一体が刻まれている。会津では唯一の摩崖仏群とされ、不動明王を中心に大小さまざまな尊像が岩の曼陀羅を成している。

鮭立に土着していた修験者の親子二代が、天明の飢饉で苦しむ村の惨状に、病苦退散と五穀豊穣を願って半世紀をかけて彫り刻んだといわれる。人々はこの摩崖仏を「ほろし（皮膚病）の神様」としてすがり、麻疹や猩紅熱に罹ると豆腐半丁を供えて平癒を祈願し、回復するとさらに半丁を供えてお礼参りをしたという。

透かし彫りの火炎光の奥に立つ不動明王以外、一〇センチ余りから六〇センチほどの尊像はほとんどが風化して尊名不詳だったが、地元の松前寺の先住、故・今井亮修師の長年の研究によって、そのほとんどの尊名が判明したことを知る人は少ない。

（写真・菅家博昭）

消えた村の記憶

写真・文　竹島善一

只見の町中から田子倉ダムの築堤へ三キロほど遡上すると、只見川の左岸に石伏の集落があった。

川に並行して田と家々が続く集落は村中に水の道が行き渡っていて、山間地なのに水郷の趣があり、ゆったりした生活感が見られた。

昭和五十八年、家々の取り壊しが始まり、水の恵みに生きた石伏は、その水のゆえにダムの下に消えた。

（昭和五十七年六月　只見町石伏）

聞き書き百選

じいちゃんの写真

只見町立只見中学校　一年　五十嵐　菜奈（平成二十一年当時）

私は、今十三歳です。この写真は昭和三十六年五月にじいちゃんが仕事をしている所を撮ったものです。この頃は旧賃金が四百円～五百円で現在の一万円と同じ位だったそうです。写っているのは、今の蒲生から寄岩にかけられている蒲生橋です。蒲生からは十人ほど部屋人夫の方達が二十人で仕事をしていたそうです。一年中通しての作業で冬には積雪が四メートルになる時もあったそうです。

じいちゃんの仕事は、主にウィンチまきをしたりコンクリートを必要な量の三分の一くらい一人で運ぱんしたそうです。

この橋ができるまで約二年半ほどかかりました。まだじゃり道ですが車も通れるようになり大変便利になったそうです。その前は今の線路のすぐそばに県道があって塩沢まで通っていましたが、寄岩に行くときは木のつり橋を渡ったそうです。人や馬しか通れなかったそうです。この頃は今と違って仕事は一ヶ月休みなく働くこともできたそうです。

春になると、土木の仕事はやめてほとんどの家でぜんまい取りをするそうです。荷上げに三日かけて運び、約三十日間とまり山をしていたそうです。その頃はどの家もびんぼうで、一生懸命働くばっかりで遊んでいるひまも、遊ぶ場所もなかったそうです。

昔はびんぼうでみんな一生懸命働いて家族のためにがんばっているんだと思った。休みもなく仕事を続けるのは大変だと思う。

取材ノート

五十嵐　菜奈　さん（平成八年生）
当時中学一年生
五十嵐　剛（たけし）　さん（昭和五年生）

Q：中学校一年生の菜奈さんと話した時のことを覚えていますか？

剛さん：これ、本になったのな、持っているわ。

菜奈さん：十年も前のことだね。

剛さん：工事現場にコンクリ練り場作って、ウィンチしつけて、それをワイヤーで吊り上げる。私が運転して半分以上コンクリートを運んだ。

Q：ムシロみたいなのが巻かれているのは何ですか？

剛さん：橋がまだ完成していないから、傷まないようにコモを巻いておいた。これを取ってしまえば、そこに「蒲生橋」と書いてある。トラス橋には上下があって、アーチ橋とは違うよ。

Q：冬は、コンクリート大丈夫だったのですか？

剛さん：冬は、電気で水を温めた。

Q：年中休みなく働いたそうですね…。

剛さん：まずあの頃は、みんな休みなしで働いたもんだ。橋工事は冬でも出来るって言ってな。工事の邪魔になる雪は、川に流せばいいから。

Q：春になるとゼンマイ採りをされたんですか？

剛さん：村から仕事に出ている者たちは土木仕事休んで行くわけ。ゼンマイの方が稼げたから。朝五時に家を出て片道四キロ以上真奈川まで歩いて行った。生で十貫目（約四〇キロ）背負ってきて、干せば一貫目、十分の一になんだ。

Q：誰に売ったのですか？

剛さん：二～三人買いに来るから、一番高い人に売った。三〇年ぐらい前までのことだな。

Q：ここの裏手には、蒲生岳（八二八m）がそびえています。登ったことはありますか？

菜奈さん：小学生の時から、山開きの時などに何回も登っています。

剛さん：山登りなんて、したことねぇな。薪採りには、よく行っていたがな。昔は、熊とか猿とかこの辺には出てこなった。

Q：工事現場で働いていて、つらいこともあったでしょう？

剛さん：つらいことなんて、若い時あったかな。働かなければ食っていけない。仕事が嫌だなんてことは無かったな。

笹船の船頭もやったことがある。覚えるまで「竿は三年、櫓は三月」だな。

Q：高校卒業後、地元に就職されたのですね。

菜奈さん：私は人混みが苦手なので、都会に行きたいとは思わなかった。

写真・文責：菅　敬浩

後継ぎ始動！

吉野　夏樹さん　昭和五十八年生
潤子さん　昭和五十九年生

夏樹さんは高校卒業後、郡山の日本調理師専門学校で和洋中を広く学び、卒業後は懐石料理店や国賓が来訪する磐梯熱海の旅館で研鑽を積む。総理とウィリアム王子の晩餐会に携わるという経験もした。経営や調理の修行を経て金山町に帰郷。料理が評判の温泉旅館・鶴亀荘を親子で運営している。

「父親とぶつかることはあります。そこは、親子であれ切磋琢磨して、いいものを創っていくという通過点であるように思います。両親には頭が上がりません。自分が親と同じ年代になった時に、同じ様な知識や才覚があるのか？と思う時があります」。愛娘も四歳になって可愛い盛りだという。

落雁の木型

小さくて薄い菓子用の、一枚型の木型。

お菓子屋さんがなかった昭和村大芦集落では、一般家庭の多くで所有し使われてきた。摩耗するほど使い込まれた木型での再現は、砂糖と餅粉、水の割合が微妙で、なかなか本来のものに近づくのは困難だった。一枚の木型に五種類の形が彫られている。

令和の奥会津風土記

(二) 柳津町

むらをあるく

石生集落

八月二十二日に只見町・金山町、九月十一日に柳津町の小巻、野老沢から柳津発電所、郷戸原の石生前遺跡、大峯、久保田。十月九日に昭和村大岐、柳津町胄中・黒沢・砂子原、三島町大登と奥会津の村々を赤坂憲雄(学習院大学教授)さんと歩いた。今号は前号の継続で柳津町西山地区を記す。

小巻集落の地蔵堂

大峯

標高五〇〇mの尾根に集落が形成されており、伊夜彦神社を祀る(文化六年(一八〇九)『新編会津風土記』、以下『新記』)。東には銀山峠、西の斜面を下れば湯八木沢・滝谷に。北の尾根道は郷戸原を経て柳津虚空蔵様に近い。尾根筋に南下すると松ヶ下集落を経て拠点集落の田代に出る。明治十年に田代村と大峯村が合併し久保田村となった。

大峯　弥彦神社

弥彦神社

久保田

『新記』では田代村。伊夜彦神社(現在の弥彦神社)には石鳥居があると記載されている。現在は久保田。永禄十年(一五六七)に那須から来た弘繁という僧が正徳寺を開く。

赤坂憲雄さんらと聖徳太子信仰(タイシ)について議論になった(註一)。

福島県歴史資料館学芸員(当時)の藤田定興さんが次のよう

に書いている。

「中世から近世初期にかけ、主に会津で宗教活動をしていた「太子守」（タイシモリ、またはタイシマモリ）の一派がいた。「太子守」は、その名の通り聖徳太子を守護する宗教者に対して名付けられたもので、このような一派を「太子守宗」と俗称している。彼らは無本寺であったため、会津藩の宗教統制、とりわけ本末改めによって事実上消滅させられたから、どのような宗教で、どのような活動をしていたのかの詳細はつかみがたい」（註二）。

砂子原

集落内に数箇所、大きな水槽がある。熊野神社参道脇のものは新造されたもの。明治四十四年（一九一一）四月に大火があったことと関係しているのかどうか、今後調査を進めたい。集落内居住面に水田を持つことから冷水を滞水させるための装置を兼ねているようにも思えると赤坂さん。山形県内で、水を温めるための同様の仕組みを見たという。

熊野神社

胄中

夏に舘沢の鬼渡様の木の鳥居が朽ち倒れ、大成沢の鈴木工匠（工房は黒沢にある）が製作した鳥居を、地区役員の五名により九月一九日に再建している。九月二十七日の三島神社祭礼で鬼渡様も遙拝した。三島神社は『新記』では「大沼荘神山村赤木大明神、天文七戌卯月日（一五三八）、平盛幸と彫付」のある径五寸の鰐口（わにぐち）があり、石鳥居があると記載（註三）。

村歩きでは、集落南方台地に並び立つ「風の三郎様」「山の神様」の石祠を見た。風神と思われる神は当地では初見である。

胄中

左：風の三郎様　右：山の神様

黒沢

明治五年（一八七二）四月伊藤次平が建てた石像を見た。緑色凝灰岩製で高郷・西会津等に産するものに似ている。石材がどのように輸送されたのか話題になった。

註一）赤坂憲雄『山野河海まんだら』（筑摩書房・一九九九年）に「川まつり・山形県戸沢村金打坊「タイシ番」」が掲載されている。

註二）藤田定興「会津藩における仏教統制の確立」『歴史資料館研究紀要』第三号（福島県歴史資料館、一九八三年。

註三）神山村は文亀元年（一五〇一）の「山内家文書」にも「大沼之郡神山」「屋き沢」「大谷」とある。『中世の奥会津』（南会津教育委員会、二〇二〇年）一五八頁。

文・菅家博昭
写真・菅　敬浩

村歩きクイズ

クイズに答えて奥会津の地場産品を貰おう！

問題 「風の三郎様」は柳津町のどこの集落にありますか。

ヒント：「令和の奥会津風土記」を参照してください。

正解者の中から抽選で５名様に、三島町の「木製掛け時計」をプレゼントいたします。

●応募方法：官製ハガキに奥会津だよりの感想、住所、氏名、電話番号を明記の上、答えをお書きください。

●あて先：〒969-7511
福島県大沼郡三島町大字宮下字中乙田979
奥会津書房 宛

●応募締切：2021年1月15日消印有効

※当選者の発表は、商品の発送をもってかえさせて頂きます。※クイズの答えは次号118号で発表いたします。

◎116号 の答え：「熊野神社」「白山神社」

たくさんのご応募ありがとうございました！

奥会津だより 定期読者募集中

ご希望の方は事務局まで発送先（ご住所・お名前）をご連絡ください。

問い合せ先：奥会津書房
TEL.0241-52-3580　FAX.0241-52-3581
E-mail : oab@topaz.ocn.ne.jp

表紙について

苧（お う）積みを支えた回文

昭和村の五十嵐かよ子さんは、嫁して七十余年、姑から譲り受けたオボケ（苧桶〈おぼけ〉）を今も使っている。姑も義母から譲られたという。修理し、補強し、何代にもわたって使い続けられている苧桶は驚くほど軽い。苧麻（からむし）を細く裂いて繋ぎながら糸を作り、少しずつオボケに貯めていく。まさに「細い苧を積み上げる」ような気の遠くなる作業を、降り積む雪の音をききながら、村の女性たちは雅な夢に思いを馳せたのだろうか。

蓋の裏に丸く書かれているのは当時の回文歌。

なかきよのとおのねふりの　みなめさめ
なみのりふねの　おとのよきかな

（長き夜の　遠の眠りの　みな目覚め
波乗り船の　音のよきかな）

正月二日の初夢に、七福神の宝船の絵を枕の下に置く風習は、室町時代ごろに始まったとされている。この回文歌を詠んで寝ると吉夢を見ると信じられた文化が、古くから昭和村でも行われていたようだ。

お便りコーナー

●“リニューアル奥会津だより”充実していますね。埋もれた地域の歴史・民俗を訪ね歩き、未来に新しい風景を見る試みには大賛成です。（倉敷市：N.Hさん）

●コロナ等々気の休まらない日々が続く中で貴紙が届き、心救われ紙面の隅々まで食い入るように見ております。とりわけ「令和の奥会津風土記」にワクワクドキドキです。土地の人々が大切に守ってきたお堂や風習のことを思うと心打たれます。感謝の気持ちでいっぱいです。（さいたま市：I.Sさん）

●「奥会津の自然誌」トトロの森とものけの森の違いが書いてあったが、自然林は１割ほどしかないとのこと。ブナの森は本当に素晴らしい。（流山市：T.Jさん）

●発刊の回数が少なくなったとはいえ、そこには十分なボリュームと重厚感。「伝えたい」という気持ちが実に伝わってくる、今までにない新しい貴紙の姿だと思いました。（阿賀野市：T.Mさん）

●初めて読みましたが、異空間に自分がいるような感じで楽しめました。世の中、まだまだ知らない町があるのだと思いました。貴紙は一生懸命作っている感じがよく、また読んでみたくなりました。（矢板市：K.Nさん）

●グループホームでボランティアをしていますが、貴紙のバックナンバーを皆さんと見ましたら、戦争で戦死されたご家族のことなどに話が広がり、心のひだ深くにいろいろな悲しみがひそんでいることに感じ入りました。（東京都：O.Yさん）

納豆も年取り

柳津町胄中では 12 月 27 日に納豆を寝せて、納豆の年取りをしました。この日に寝せた納豆を大晦日の神棚に飾り、１月６日に食べます。寒中に藁苞（わらつと）のまま外に干して乾かすと、田植えの頃まで食べられました。

イベント情報について

コロナの影響により、各種イベントが中止や延期を余儀なくされています。今後も奥会津との健やかな交流が継続できるよう、様々な方面から計画を見直し、新たな形でご案内ができるよう地域一丸となって取り組んでいます。

楽しい企画をご案内できる日を、皆様と一緒に待ちわびています。

コロナにも寒さにも負けずに、どうぞよいお年をお迎えください。

奥会津 歳時記の郷

発　行：只見川電源流域振興協議会（柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町（南郷、伊南、舘岩地域）・檜枝岐村）
発行日：12月15日発行（年３回発行）　**事務局**：〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平 933 番地 奥会津振興センター内
TEL.0241-42-7125 http://www.okuaizu.net webmaster@okuaizu.net
編集・問合せ先：奥会津書房　福島県大沼郡三島町宮下　TEL.0241-52-3580
★只見川電源流域振興協議会は、福島県只見川流域の７町村の活性化と振興を図るために活動している団体です。
この冊子は電源立地地域対策交付金の事業により作成されています。